

事故当初における当社の公表/通報内容、および官邸・政府の公表内容<時系列>

事故直後の情報公開に問題があったことを改めて深くお詫び申し上げます。事故直後における情報公開を反省し、再び、地域住民の皆さま、社会の皆さまから信頼が得られるように、対策を講じて参ります。
(注意事項)

- 本資料は、本日現在で判明している東京電力福島第一原子力発電所事故が起きた直後の当社発表文、通報文等を改めて整理して、一覧表にしたものです。
- なお、表中の「黒字」は当社(官邸・原子力安全・保安院(以下、保安院)とも関連するもの含む)、「青字」が保安院、「緑字」が官邸、「ピンク字」が政府指示に関するものを示しています。
- 併せて、「評価」の項目に記載している記号は、当時置かれた状況を技術的な評価を元に、原子力改革特別タスクフォースが3つの分類(“a:事実を誤認識し公表したと思われるもの”、“b:迅速に公表するという積極的な姿勢が足りなかったもの”、“c:外部との調整に時間を要し、公表が遅れてしまったもの”)に整理したものです。

日時	評価	主な対外説明案件(行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む)/事象	備考
3/11 16時54分	b	プレス「原災法10条」 ・1F1~3,原子力災害対策特別措置法(以下、「原災法」)第10条第1項の規定に基づく特定事象(全交流電源喪失)が発生したと15時42分に判断,官庁等に16時00分頃通報。 プレス資料	➢ 通報から発表まで、54分程度の時間を要する。
17時40分	a	プレス「原災法15条」【誤報】 ・1F1及び1F2の非常用炉心冷却装置に関して注水流量の確認ができないため,原災法第15条特定事象が発生したと16時36分に判断,官庁等に16時45分頃通報。その後、1F1は水位監視が回復したことから、一旦特定事象を解除するも、17時07分再度適用、17時12分に通報。 プレス資料	➢ 通報文上は「注水状況が分からない」となっているが、プレス文では「注水流量の確認ができない」としている
19時35分	a	プレス「1F時報(19時報)」【誤報】 ・1F1はICで冷却、1F2,3はRCICで注水中 プレス資料	➢ 1F状況の第一報。1~3号機で冷却できている旨伝達しているが、1,2号とも15条通報(注水状況不明)と齟齬あり。
19時50分頃		官邸会見「緊急事態宣言発令」 ・「原子力安全対策本部が開催され、16時36分原災法15条1項2号に該当する事象が発生し、原子力災害の拡大の防止を図るための応急の対策を実施する必要があると認められたため、同条の規定に基づき、原子力緊急事態宣言が発せられた。現在のところ、放射性物質による施設の外部への影響は確認されていない。したがって、対象区域内の居住者、滞在者は現時点では直ちに特別な行動を起こす必要はない」 会見録	
21時02分 /21時15分	b	通報文「2号機運転状況及び避難開始要請の準備」/「2号事故進展予測通報」【未公表】 ・RCICによる炉注水状況も確認できないため、原子炉水位がTAFに到達する可能性がある。そのため、地域住民に対し、避難するよう自治体に要請の準備を進めている ・TAF到達予想は21時40分頃。炉心損傷開始予想22時20分頃。RPV破損23時50分頃。1号機は評価中 通報文	➢ 20時50分に福島県から避難指示が出ているのに対し、通報文の発信自体遅くなっている ➢ プレス文「19時報・21時報」の発表内容と異なっている。
21時55分	a	プレス「1F時報(21時00分)」【一部誤報】 ・1F2 RCICで冷却するも、運転状態不明、水位確認不能、住民避難の自治体勧告あり(半径2km圏内) プレス資料	➢ プレス文「19時報」と比較し、いつから運転状態不明となったのか示されていない ➢ 通報文で示されている「2号事故進展予測」も伝達せず。
22時00分頃		官邸会見「3km圏内の避難指示」 ・既に一部報道にある通り、原子炉のうち、1つが冷却出来ない状況になっており、この状態が継続した場合に備え、念のため、避難をしていただきたい 会見録	
22時18分頃	-	プレスルームにて「2号機水位確認」を伝達。正式な発表文(プレス文)としては、0時30分公表 ・燃料を上回るレベルの水位があることは確認できている。十分な冷却が出来ているかについては、引き続き注視していく必要がある 新聞報道等	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
23時15分		<p>保安院 会見「2号機、水位安定」</p> <ul style="list-style-type: none"> 「東京電力の22時報告によれば、原子炉水位が未確認だった2号機で、燃料棒上部から340cmに水があり、水位が安定していることが確認された」と発言。炉内の水がなくなると水蒸気圧が高まり、最悪の場合、格納容器から外に放射能が漏れる危険性もあるが、現時点では安全性が保てていると説明 <p>新聞報道等</p>	
23時40分	b	<p>通報文「1号タービン建屋線量上昇」【一部未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 23時のサーベイで、タービン建屋1階北側1.2mSv/h、1階南側0.5mSv/h。原因は調査中 <p>通報文</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 1号機異常の警鐘となる可能性も高かったがプレス未実施。 ➤ 新聞報道等によれば、福島において当社は、「1号機の建屋のなかで放射能レベルが上がっている」と説明を行っている。
21時51分～ 23時50分	b	<p>1号機の線量上昇に関して【一部通報未実施 / 未公表】 23時のタービン建屋線量上昇は通報文のみ実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 11日21:51、ICの胴側水位と原子炉水位の確認のため原子炉建屋に入域した運転員から、警報付きポケット線量計（APD）の数値がごく短時間で0.8mSvとなり現場確認を断念したことが、中央制御室に報告された。中央制御室では、一旦原子炉建屋への入域を禁止し発電所対策本部に報告した。 11日22:03、当直長からAPDの数値が上昇したとの報告を受けた発電所対策本部は、現場の放射線量測定のために保安班2名を現場に派遣した。 11日23:00、現場に向かった保安班2名がタービン建屋1階の原子炉建屋二重扉前で測定を行ったところ、タービン1階北側二重扉前で1.2mSv/h、タービン1階南側二重扉前で0.5mSv/hであることを確認し、発電所対策本部に報告した。 測定された放射線量から、原子炉建屋内の線量が300mSv/h程度と予想されたことから、発電所長は、人身安全の確保のため、11日23:05、原子炉建屋への入域を禁止し、中央制御室に連絡した。ICが動作し原子炉水位が安定しているという情報が得られている一方、放射線量が増加してきたという状況から、発電所長はICの動作状況に疑問を抱くと共に、原子炉に何らかの異常が起きているのではないかと考え始めた。 現場で放射線量の測定を行っていた保安班2名は、11日23:33に北側二重扉について、23:50に南側二重扉について、立入禁止の張り紙をし、立入禁止措置を完了した。 <p>社内事故調</p>	
3/12 00時00分頃		<p>官邸会見「途中経過」</p> <ul style="list-style-type: none"> 非常用炉心冷却装置による注水不能な状態が続いているが、現時点で放射性物質の放出はない。 住民の皆さんは、テレビ、ラジオ等の情報に注意をしつつ、自治体、警察、消防、自衛隊に応援にいただいている、こうした指示に従い、落ち着いて行動いただきたい <p>会見録</p>	
0時30分	-	<p>プレス文「1F時報（0時報）」</p> <ul style="list-style-type: none"> 2号機仮設電源にて水位確認でき、水位は安定 <p>プレス資料</p>	
1時35分	-	<p>プレス文「1号機格納容器圧力異常上昇」</p> <ul style="list-style-type: none"> 1F1、15条通報（格納容器圧力異常上昇を0:49判断） プレスルームにおいて「1号機の格納容器内の圧力が設計を上回る数値を計測したことから、圧力を外部に逃がす措置を検討する。この際には外部に放射能が漏れる恐れがある」と回答。「手をこまねいているとパーストする危険性があるのか」との質問に対しては、「国や自治体と相談のうえ、ベントをすることになる」と説明。 <p>プレス資料、新聞報道等</p>	
2時47分	b	<p>通報文「1号機プラント状況」【未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 2:30時点で、「D/W圧力840kPa、原子炉水位TAF+130cm（A系）、TAF+53cm（B系）」 <p>通報文</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 本内容に関して当社は未公表。 ➤ D/W圧力に関して、保安院は4:30報にて「1号機の格納容器内圧が上昇しており、設置値400kPaのところ、840kPa程度まで上昇している可能性がある」と公表

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む）/ 事象	備考
3時06分～ 3時48分	a	<p>「ベント実施」に関する共同記者会見（当社から小森常務が出席）</p> <ul style="list-style-type: none"> 「圧力が上がっているのは、1号機だが、1号機もまだ2倍にいつているわけではなくて、2号機も。ただしそのパラメーターの精度に関しては、注水機能がブラインドになっている時間が長い2号機の方が本当かということを確認していくべき」と発言 1号機の注水状況に関しては、「蓄圧タンクのようなものがあり、そこから水が入ることが期待できるという。それからその蓄圧タンクのほうの水にも、注水で水をメイクアップしているということを続けている」と説明 質疑応答において「電源つなげば大丈夫で、電源をつなぐ作業が準備できたと、あとは人の手配だけだと、こういう説明を縷々ずっと聞かされていた。それで、1号機の圧力も高まったという話を聞いていたら、なぜかわからないが2号機の減圧作業をしなければいけないとか言い始めて、その理由がさっぱりわからない」と問われ、「電源をつなぐ準備を、いまでも鋭意やっている。本当に給水できているか一番最初に怪しくなったプラントが2号機」と説明する。 その後、当社社員から2号機 RCIC 稼働が確認できた旨、会見場にて伝達する（3時33分通報文の内容）。そのことによって、ベント実施する必要がないのではとの発言もあったが、保安院長が「1,2号機で混乱があったことをお詫びする。1号機を最初にして、2号機という趣旨ではなく、号機は触れず、全体として開けることがありうる」と説明して、会見が終了する。 <p>会見議事録</p>	<p>➤ 1号機に関しては、IC が稼働しているかのように誤認識をしている。</p>
3時12分頃		<p>官邸会見「ベント実施に向けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京電力及び経済産業大臣からも発表している通り、原子炉格納容器の圧力が高まっている恐れがあり、健全性を確保するため、内部の圧力を放出する措置を講ずる必要があるとの判断に至ったとの報告を東京電力より受けた。経済産業大臣とも相談したが、安全を確保する上で止むを得ない措置であると考え この作業に伴い、原子炉格納容器内の放射能物質が大気に放出される可能性があるが、事前の評価では、その量は微量と見られており、海側に吹いている風向きも考慮すると、現在とられている、発電所から3km以内の避難、10km以内での屋内待機により、住民の皆様の安全は十分に確保されており、落ち着いて対処いただきたいと思う。 <p>会見録</p>	
4時15分	-	<p>プレス文「1F 時報（04時00分）」</p> <ul style="list-style-type: none"> IC 運転していたが、停止。PCV 圧力高めも安定。水位も低い安定 1F2, RCIC 運転状態確認 <p>プレス資料</p>	<p>1号機ドライウェル圧力は、12日2時過ぎにピークを示して以降、ほぼ横ばい、もしくは若干の低下傾向を示すこととなるが、そうした状況下で「高めも安定」との表現を使用した。</p>
4時55分	b	<p>通報文「発電所構内における線量上昇」 【未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1号中操（4:00頃）150uSv/h、免震重要棟（4:03）0.08uSv/h、モニタリングポスト正門（4:23）0.59uSv/h、モニタリングポスト8番（4:15）0.23uSv/h 急病人発生のため救急車を要請 <p>通報文</p>	<p>➤ プレス文（本店5時報）にて「構内線量が通常値よりも上がってきている」という事実のみ発表。1号中操線量上昇については、未公表。</p> <p>➤</p>
5時14分	b	<p>通報文「外部への放射性物質の漏えい」 【未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 構内放射線量の上昇及びD/W圧力も低下傾向にあることから、外部への放射性物質の漏えいが発生していると5時14分に判断 1号D/W圧力0.84MPa 0.77MPa（5時9分） <p>通報文</p>	<p>➤ 「放射性物質の漏えい」に関しては、公表していない。</p>
5時10分頃	b	<p>通報文「正門付近で放射性物質を検出」 【未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発電所正門付近でチャコールに放射性物質を検出（核種は確認中）2.5×10^{-4} ベクレル/cm³ <p>通報文</p>	<p>➤ 「放射性物質の検出」に関しては未公表。</p>
7時00分頃		<p>官邸会見「10km圏内の避難指示」</p> <ul style="list-style-type: none"> 容器内の圧力が上昇していることから、経済産業大臣の指示により、安全に万全を期すため、先程、1号機の原子炉格納容器内の圧力を降下させる措置を行った。 このため、放射性物質を含む空気の一部外部への放出が行われますが、管理された中での放出となる。現時点で、放射性物質を含む外部への流出は確認をされていない。 <p>会見録</p>	
7時59分	b	<p>通報文「7:30現在の状況」 【未公表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発電所正門付近・免震重要棟玄関前付近でチャコールに放射性物質を検出。 1号ベント操作に向けて電源復旧用の仮設ケーブル敷設作業を実施。 <p>通報文</p>	<p>➤ 「放射性物質の検出」に関しては未公表。</p>

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
9時頃	-	記者レク「1号機の状況」 ・ 1号機のベントの実施状況ならびに、注水開始した旨情報伝達する。 新聞報道等	
9時45分		保安院会見 ・ 23時40分通報文内容、12日未明以降1号機格納容器圧力が設計上の最高使用圧力を超えた状態になっていること、正門付近における放射線量が同日早朝から急上昇したこと等の情報を踏まえ、燃料の一部がこの数字（3月12日9時15分現在の水位データ）からすると露出しているため、被覆管が一部溶け始めていることも考えられます」と説明し、記者からの「燃料の一部が溶け始めている可能性があるということですが」との質問に対し「可能性を否定できないということです」とのみ説明した。 政府事故調	
11時03分～ 11時42分	a	電力需給等に関する記者会見（藤本副社長ほか出席）「燃料溶融に関する質問」 ・ 冒頭にて、藤本副社長から「原子炉は安全に停止したが、炉内冷却水位の低下により、微量の放射能漏れが発生するなど、立地地域をはじめ社会の皆さまにご心配とご迷惑をおかけしている」と発言 ・ 質疑応答において、「保安院会見のなかで、燃料棒が露出しており、これによって一部溶け始めている可能性も否定できないとの発言があったが」と問われ「1号機は、現在、原子炉の水位が燃料棒頂部ぎりぎりのところから若干低め、50センチくらいのような状況だが、水が50センチくらいかかっても若干冷却するが、ある程度、過熱するおそれがあるので、燃料棒の頂部で若干、燃料の損傷がある可能性は否定できないという風には考えておりますが、周りの放射能レベルからして、大きな損傷はまだ生じていないとそう判断しております」と回答。 会見議事録	➤ 1号機の水位計の数値に関して、正しい値を示していると誤認をしている。
11時20分	-	プレス文「1F時報（11時00分）」 ・ 1F1ベント操作実施中。水位低くなってきており、順次注水を実施中 プレス資料	
14時頃		保安院会見 ・ 保安院幹部は、敷地内のモニタリング測定値が高くなっていること、全交流電源喪失から相当時間が経過し、ICが稼働しているとは考えられない上に、水位が燃料棒頂部より下の状態が続き、更に水位が低下し続けていることから、1号機は炉心溶融が発生している可能性が高いと考えられる旨、保安院長に報告した。保安院長は、同日午前、敷地周辺でセシウムが検出されていることなどから、燃料棒に問題が起きていると考えざるを得ない旨の報告を受けていたため、「（事実がそうであるなら）そのように言うしかない」旨告げた。 ・ 保安院幹部は午前の会見よりも更に踏み込んで「炉心溶融の可能性はある。炉心溶融がほぼ進んでいるのではないだろうか」と説明した。 ・ 当時の保安院プレス発表内容は官邸に事前連絡されていなかったが、官邸会見での対応に苦慮している状況なども踏まえて、首相秘書官は、官邸に事前連絡するよう要請した 政府事故調	
17時すぎ	-	プレスルームにて「1号水素爆発の第一報」 ・ （広報部職員ほか）15時36分頃、大きな直下型の揺れがあって、その後、1F1の建屋付近で白煙が発生致し、復旧に当たっていた社員2名、協力企業2名が負傷し、病院に搬送された現在分かっているのはここまでと第一報を伝達 社内事故調	
17時40分	-	プレス文「1F1白煙発生」 ・ 15:36頃1F1付近で大きな音があり、白煙が発生。社員2名、協力企業2名が負傷し、病院に搬送 社内事故調	
18時頃		官邸会見「1号水素爆発を受けて」 ・ 官邸には1号機原子炉建屋爆発に係る資料等がほとんどなかったため、会見では「何らかの爆発的事象があったということが報告されております」と説明するに留まらざるを得なかった ・ 「炉の破損を政府として確認できているのか」という問いに対して、直接回答をせず、「現時点では10キロ圏内から出ていただければ大丈夫と認識をし、分析など進めている。」と回答 政府事故調、会見録	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む）/ 事象	備考
19時36分～ (21時21分)	b	<p>原子力事故・電力需給に関する記者会見（藤本副社長、小森常務ほか出席）「炉心溶融に関する質問」</p> <ul style="list-style-type: none"> 保安院が炉心溶融の可能性に言及しているがという問いに対して、「セシウムが検出されたという話については我々自身も報告をしているわけですが、セシウムというのは燃料等に関連する核種ということですので、炉心そのものが通常とは違う状況にありうるという前提で、対応の手順を踏んでいく必要があると思う」と回答。それに対して、炉心溶融には至っていない可能性が高いと判断しているのかという更問があり、「お答えが難しいが、考え方としては、厳しい状況で考えるということであるが、まあそこまでいってない可能性があるかもしれない。ただ、そうなっている可能性も含めて事故時の対応を考える」と回答。 また、「水位は燃料棒マイナス170cm程度という数値で15時27分値から変更ないが、水位がくるっているのではないか。また炉内は厳しい状況にあると言っていたが、炉心溶解は起こっているのか」という質問に対して、「A系B系2つの指示系で見ているので、まあちょっと実際そうかと言うことも含めて見ているけれども、2系統の指示値の数値であるという事は事実であると。炉心溶解や変形の程度についてはよく分からないが、通常より温度が高い状況である可能性があると思って対応した方が良く考えている」と回答。 官邸会見の関係で水素爆発と発言したようだが、と問われ、「爆発ということは認識しているので、エネルギーがどこから来たかということについては、可能性はあるのかなと思っている。可能性という意味でおっしゃられた、そういうことかな」と回答。また、爆発前より爆発後のほうがむしろ放射性物質が少なくなっていると発言しているようだがと問われ、「ちょっと、すみません。そこまでの分析ということで把握はしていない」と回答。同じく、「爆発は格納容器内ではない。格納容器には問題がない。放射能が大量に漏れ出すものではない」と言っているようだが、と問われ「どういう根拠でお話になったかというのは、事業者が出しているデータは見ておられると思うが、ちょっと、そこまでの解釈を、当社内ではまだ・・・」と回答 <p>録音テープ</p>	<p>➤ 同時に行われていた官邸会見での発言内容に関して問われるも、その内容に関して答えられず。「水素爆発」に関しても、「可能性がある」として、断言するに至らなかった。</p>
20時41分～		<p>官邸会見「1号爆発、首相会見を引き継ぎ会見」</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の爆発について、東京電力からの報告を踏まえ、説明をする。 原子力施設は、鋼鉄製の格納容器に覆われている。そして、その外が更にコンクリートと鉄筋の建屋で覆われている。今回の爆発は、建屋の壁が崩壊したものであり、中の格納容器が爆発したのではない。 爆発の理由は、炉心にある水が少なくなったことによって発生した水蒸気が、格納容器の外側の建屋との間の空間に出て、その過程で水素になっていて、その水素が酸素と合わさって、爆発が生じた。格納容器内には酸素がないので、水素等があっても爆発等をするのではない。実際に東京電力から、格納容器が破損していないことが確認されたと報告を受けている。繰り返しになるが、このたびの爆発は原子炉のある格納容器内のものではなく、したがって、放射性物質が大量に漏れ出すものではない。 東京電力と福島県による放射性物質のモニタリングの結果も確認したが、爆発前に比べ、放射性物質の濃度は上昇していない。報道された15時29分の1,015マイクロシーベルトだが、この地点はその後、15時40分が860マイクロシーベルト、18時58分は70.5マイクロシーベルトとなっておりまして、爆発の前後でむしろ少なくなっている。その他の地点も、14時頃から行われたベントにより、前後で一旦高くなっているが、爆発を挟んでも、いずれも低下しており、低いレベルにとどまっている。 その上で、今後懸念される原子炉容器及び格納容器の破損による災害を未然に防止するため、東京電力が容器を海水で満たす措置を取ると判断し、経済産業大臣が指示をした。その際、併せてホウ酸を用いることによって、念のために、万が一にも再臨界などの懸念される事象が生じないよう工夫することも確認している。政府は、経産省、保安院と確認し、妥当性を評価しており、20時20分、着手している。 なお、避難指示については、爆発の状況等も踏まえ、万一の対応策として20km圏内から退避いただくことへと拡大した。 <p>会見録</p>	
21時30分		<p>保安院会見</p> <ul style="list-style-type: none"> 炉心溶融の意味を国民に分かりやすくという質問に対して、「まだ炉心の状況は正確には確認できていないので、これからどこまでできるか不明だが確認していきたい」「炉心が破損していることはかなり高い確率だと思うが、状況がどうなっているのか現状では正確に分らない」と回答 <p>政府事故調</p>	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
深夜		<p>官邸から当社への情報公開に関わる指示</p> <ul style="list-style-type: none"> 福島県において 1 号機原子炉建屋爆発後の同建屋写真が公表されていることを知り、官房長官秘書官らをしてその写真が官邸に提供されていない経緯を調査させた上、清水正孝社長に対し、電話で迅速な資料提供を要請するなどした。 爆発後の 1 号機原子炉建屋写真を用いて当社福島事務所が福島県に説明している様子が全国ニュースで放送された。この写真を広報用を使用することについては、本店・官邸とも把握していなかったが、特に官邸はこのニュースに対して、事実関係の説明を当社に求めるとともに、官邸の知らないところで上記対応が行われたとして当社は注意を受けた。具体的には、上記ニュースで官邸が知らない写真を使って広報している経緯を説明するよう官邸で対応していた当社社員は求められ、事実関係を確認の上回答したところ、官邸から由々しき問題との指摘を受けた。 <p>政府事故調、 社内事故調</p>	
3/13	5 時 30 分	<p>保安院会見</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 号機の燃料溶融の可能性に関する質問に対し「可能性として否定できないことは、もう既にそういう物質（セシウム）が出てきているということから、念頭に置いておかなければいけない」と説明 <p>政府事故調</p>	
	8 時頃	<p>官邸会見「3 号機の注水機能停止を受けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業者への要望はあるかという問いに対して、「まず保安院や安全委員会、政府が適宜適切に判断、指示を出していく。そして、住民、国民のみなさんの安全に関して、スピーディーかつ正確に情報を提供していくことが、こうした対応の大前提。これまで、問題発生から 1 日半ぐらい、繰り返し、保安院、経産大臣、総理も含めて、東京電力に対しては適宜適切にスピーディーに、かつ正確な情報を提供し、なおかつ、公表するように、繰り返し求めている。昨夜午前 2 時過ぎには、私から直接、清水社長に対して、その点について強く指示をした」と回答 <p>会見録</p>	
	11 時頃	<p>官邸会見「3 号機で水位低下」</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 号機の炉心溶融に関して「現時点では注水を行って、露出は水に埋まっていると水の量から思っている」「これ（炉心溶融）は十分可能性があるということで、炉の中だから確認が出来ないが、その想定のもとに対応をしているし、今回の場合も可能性があるという前提で対応している」と発言。 <p>会見録</p>	
	14 時頃	<p>官邸から社長に対する情報公開の指示</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 号機水素爆発後の写真公開に関する経緯について報告を受けた菅総理も、官邸を訪れた清水社長に対し、同様の要請をした。清水社長は立地地域部長に対し、東京電力がプレス発表する際には、事前にプレス文案や公表資料等について官邸の了解を得るよう指示し、それが原因となって広報の遅れが生ずることがあった。 （爆発後の 1 号機原子炉建屋写真を公開した問題を受けて）清水社長は午後 2 時頃に官邸を訪問し、強い注意を受けた。これを契機として、清水社長は社内関係者に対し、「今後広報する時は、まず官邸にお伺いを立てて、官邸の許しが出るまでは、絶対に出してはならない」と指示した。 <p>政府事故調、 社内事故調</p>	
	17 時 15 分	<p>保安院会見</p> <ul style="list-style-type: none"> 「炉心の状況はデータからはっきりと言えないことではないため、溶融しているかどうかは分からない」旨発言したうえで、「少なくとも炉心の毀損が起こっていると言うことは間違いないと思います。・溶融というところまでいっているのかどうかはよく分かりません」と回答 <p>政府事故調</p>	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
20時20分～ 23時13分	b	<p>社長会見（小森常務同席）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 質疑応答で「敷地境界での放射線量は変動があるものの、ただちに人体に影響が出るレベルではないと考えている」（社長）と説明。格納容器は本当に無事なのかという問いに対して、「破損の形からいうと、水素爆発が大きな要因だと思う。鉄骨がむきだしになっているが、それより下は鉄筋コンクリートの構造で、そちらまで損傷しているのではない。格納容器の部分は（蒸気を逃がす）バルブを開けた時に圧力が下がる状況がみえており、健全性は保たれていると考えている」（小森常務）と回答。さらに、津波への備えを問われ、「十分か不十分かという評価は、いろいろな視点から考えないといけないが、これまで考えられるレベルの津波対策は講じられたという意味では、妥当性は問題ないと思う。今回は想定を大きく逸脱するレベルの津波だったということが分かって、これからそれに対応する施策をどうするか、大きな課題だと思う」（社長）と説明 ・ 記者からの「先ほどの話の中で、ある程度水位計は信用出来るという話だったが、そうすると、現状海水をあれだけ入れ続けてもまだ燃料棒の方に行かずに裸の状態が続いているという状況になっているが、1号機、3号機は現在どういった状況なのか、特に1号機に関しては、今朝の段階で圧力容器内に関してはもう水が浸かっているという様な説明も受けていたので、その辺も含めて教えて欲しい」という質問に対して、「1、3号機に関して、水が中々燃料の上部まで到達してないという状況が続いている事に関しては厳しい状況という所。これ自身は水位計の精度の問題もある意味では確実にこの事象を捉えていきたいと思うが、いずれにしても燃料が完全にまだ冠水出来てないという事が可能性が高いという事で伺っている」（小森常務）と回答。その回答を受けて、そうすると現状は決して良い方向には向かっていないという認識で良いのか、このままいくと今後どういう事が考えられるのかとさらに質問があり、「今までも色々な原子力の安全の議論の中で先ほど話があった様なシビアアクシデントという様なベースがあり、そのベースの上で我々の事象がどう起きているのかという事を考えている。それで炉心の部分の冠水がされていないという時間の経緯もそういった事を考えていくと、かなり厳しい状況という事を考えた上で、但し、いずれにしても、海水も含めて、そういうような冷却する物を続けていくというのは活動としてはもうそれに尽きるの、それをまずやるべき行為が変わるものではない。後は圧力、水位だけではなくてそういったものからデータを見て、とにかく事象の進展が悪化していかない事を最優先に考えて現場の方の作業等についても優先度を考える。そういうふうに対応していきたいと思う」（小森常務）と説明を行った <p>録音テープ</p>	<p>➤ 「ただちに人体に影響があるレベルではない」との説明を行った。</p>
3/14	早朝～9時頃	<p>3号機圧力上昇を受けたプレス文の扱い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 8時頃、3号機の格納容器圧力が異常上昇したため、当社はプレスリリースを用意したが、官邸及び保安院から公表を止めるよう指示されたため、当該プレスリリースは行わなかった。当社によると、3号機の事象については保安院等に対して法律に基づく通報を行うことが義務付けられているため行ったが、プレスリリースは事業者の義務ではないため、官邸等の指示に従ってプレスを行わなかったとのことである。一事業者である東電が、官邸や監督官庁からの指示に従って行動するという事自体は、合理的であると考えられるかもしれない。しかしながら、近隣住民が危険にさらされている状況下において、情報の透明性よりも官に対する事業者としての立場を重視する姿勢は、東電の企業体質の問題が露呈したと見ることもできる。 ・ （8時40分テレビ会議映像）1F 広報班「3号機格納容器圧力異常上昇ということで15条プレス文を用意しております。国から、マスコミを止めているということで、プレス発表を行わず待っている状況です。福島県から9時の関係部長会議をマスコミオープンで行いたいとのことですので、9時までには本プレスを行うよう依頼されております。調整をいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか」本店「県が言ってますよという話は伝えてもらって、県と保安院で調整してもらおうしかなくて、我々の決定権はどちらかということ、本件は今、原災法に基づいた国の側がうんと強い中話になっているので。もちろん、県を無視することはできないのだが。」 ・ （8時45分テレビ会議映像）本店「保安院に確認してところ、絶対にダメだという見解で、このプレスは行わないという強い要請、指示だそうです」 ・ 3月14日早朝に3号機の格納容器圧力が上昇し、同日7時53分に関係機関への通報連絡を行った件については、速やかにプレス発表の準備を整えており、また、通報連絡で内容を把握していた福島県からは同日9時に行う予定の本部員会議（マスコミ公開）までには本件を公表するように強い要請があった。当社は速やかにプレス発表をすべく官邸の了解を得るために、官邸に駐在していた保安院に働きかけを行ったが、了解は得られず、福島県の要請に応えることができなかった。一方、本件について保安院は、9時15分頃に記者会見で説明している。 <p>国会事故調、社内事故調</p>	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
9時15分		<p>保安院会見</p> <ul style="list-style-type: none"> 保安院幹部は「1,3号機は炉心溶融の可能性がある」と肯定する発言をしたが、同席した保安院職員は「水素が出てくるということを考えると、燃料を覆っている被覆材、ジルカロイとの反応で出てきていると推測されるが、まだ溶融とかそういう段階では決していないと思っている」と炉心溶融の可能性を否定するかのよう説明を行った。 <p>政府事故調</p>	
12時08分～ 12時54分	b	<p>「1F3号水素爆発」に関する会見（小森常務ほか出席）</p> <ul style="list-style-type: none"> 炉心溶融の可能性を問われ、「可能性はある」と回答。溶けているのかという更問いに対して、「燃料棒の頂部が出ていても、下で蒸発した蒸気で冷却されており、その効果が現時点では評価しづらい」と回答。 <p>新聞報道等</p>	<p>➤ 社内テレビ会議映像（13:15頃）において、小森常務の電話における会話内容が録音されており、「炉心溶融の可能性が絶対否定できないんだな、という問いに対して、あまり強くも否定できないから、調べてからという感じも含めて、もやもやとなったところ、可能性ありと、直接的には答えてないけど。雰囲気をとられてしまったというのが事実」と発言。</p>
16時45分		<p>保安院会見</p> <ul style="list-style-type: none"> 水素が出ているということは溶けているということだから、溶融しているということで良いですねとの質問に対して、保安院幹部は「損傷の段階でも水素が出る場合もある」と説明した直後、同席した保安院職員が「燃料、被覆材の部分と反応して水素が出てきているということですので、溶融という言葉は適切ではない」と、炉心溶融の可能性を否定するかのよう発言をした。 <p>政府事故調</p>	
20時40分～ 21時45分頃	b	<p>武藤副社長記者会見「2号機ダウンスケールを受けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> 本店3階にて計画停電記者会見の実施を待っていた記者に、2号機がダウンスケールとなったことを伝え、1階で（計画停電の会見と同時に）説明を行う旨アナウンスしたところ、計画停電前に本件に関する会見を3階にて実施すべきとの記者側の要請を受け、急遽武藤副社長会見が実施される。会見冒頭で、19時54分頃海水注入により、水位計の指示が揺れ始め、20時07分頃においても、相変わらず水位計がハンチングしていること、また会見途中において、21時20分にSR弁を開放し炉圧を下げたところ、21時21分マイナス3,400mmだった水位が21時34分にマイナス2,000mmまで回復し、炉圧が下がって海水の流入量が増えたとみられる旨説明を行っている。 質疑応答では、水位が下がりダウンスケールということだが、燃料棒が露出して丸裸で空焚きに近い状態になったということかと質問され、「燃料棒の頂部から徐々に下がってきて、燃料域の水位計がダウンスケールしたという事で、燃料が露出している可能性があるという風に思っている」また、「スリーマイル島の事故ですら燃料が全て露出する事態に至らなかったが、かなりの量の燃料棒が溶けたのではないか」という質問に対しては、「パラメーターとか周辺の放射線の量とか、そういったものを見ないと判断出来ないで、現時点では原子炉の中の燃料はどういう状態になっているか、明確に申し上げられない」と回答。さらに、丸裸になったらどうい事が想定されるのかと問われ、「これもそれ以降の事実によるが、ここは周辺色々なパラメーターが変化するので、それについて現在注意深く見ている所」と回答。 一方で、本会見では、同様の質問が相次ぎ、「溶融の可能性は否定しないですね」という念押し的な質問に足しては、「これからのパラメーターをしっかりと見ていく必要があると思っている」と話すも、現時点でも空焚き状態などの質問が続き、「はい。ダウンスケールです」と回答すると、通常2時間以上空焚きすると燃料はどうなるのかと問われ、「一般論としては難しいが、燃料被覆管が過熱酸化するので、酸化をして強度が落ちるとい事が予想される」と回答する。 さらに、空焚き状態が継続すると、燃料自体が溶けてスリーマイルのように下に溜まってしまって、例えば、制御棒が損傷して、制御棒の役割を果たさなくなり再臨界に至る可能性があるのではないかと問われ、「とにかくそういう事で海水の方も含めて、海水を使って入れているが、その中でご指摘にあるような事も考えて、ホウ酸を入れるといったような事も保守的なことも考えている。いずれにしてもご指摘のような臨界というような事が問題になる事はないと思う」と回答。さらにはっきりしないのかと問われ、「現時点でそういうことには見ていない」と答えるも、それはホウ酸を入れているからと再質問を受け、「と言うよりは、元々の形状、特にホウ酸を入れて下がったという事ではないので、全体のレベルについて、燃料が空焚きと言うか、損傷したと思われる以降、特に原子炉の臨界ということについて、これを疑ったことはない」と回答する。一方で、燃料が損傷した可能性は認めるのかと問われ、「これは周辺に放射能が出ておりますので、燃料は損傷をしているという風に見ている」と説明を行った。 <p>録音テープ</p>	<p>➤ 社内テレビ会議映像（19:21頃からの一連の会話）において、発電所側が「TAF到達時間が16時16分、その後むき出しになったのが18時22分ということで、むき出しになったところから、約2時間で炉心溶融が始まるだろうという、ざっくりした見積もりです。その後、炉心溶融から2時間ほど経つとRPVの損傷になるだろうということで、こちらがアクシデントマネジメントガイドに書いてある数値を使ったものです」と発言したことを受けて、武藤副社長は「18時22分に燃料が全部露出したというのは、共通の認識で良いですね」で、2時間でメルト。2時間でRPVの損傷の可能性あり。良いですね」と発言。</p>

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
3/15	夜	<p>炉心損傷の状況について公表</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京電力は3月15日、格納容器雰囲気モニタ（CAMS）により得られた情報を基に「炉心損傷」の割合について、1号炉約70%、2号炉約30%、3号炉約25%である旨の発表をしたが、以降の記者会見においても、炉心の状況を説明する際は、「炉心損傷」という表現を用いた 東京電力は1,2号機の核燃料がそれぞれ7割、3割破損を受けている可能性があるとの試算結果を福島県災害対策本部に報告した。東電によると、原子炉格納容器内の放射性物質量の測定値と、運転停止後の経過時間などから、燃料を覆う金属の破損程度を概算。その結果、1号機の燃料集合体400体の70%に、2号機の548体の33%に、それぞれ小さな穴や亀裂が生じている恐れがあるとしている。1,2号機では、燃料の一部が露出した状態が長時間続いているため、破損が進んだらしい。14日に水素爆発が起きた3号機では、格納容器内の放射性物質を測定する装置が故障しており、どれだけ破損しているかを推定できない状態だという。 東京電力は1号機の炉心にある核燃料棒の70%に損傷があるとの推計をまとめ、国と福島県に報告した。同2号機も同様に33%が損傷しているという。東電によると、核燃料を覆い、外部への放射性物質を防ぐ被覆管が冷却水不足による過熱で損傷し、ひびや穴などが開いているという。ただ、被覆管が完全に破れて、中のウラン燃料が溶け出す状況にはないとしている。1,2号機は、給水機能停止で冷却水が減少。高温になった燃料棒の一部が溶け出す炉心溶融の状態になった可能性があるなど、核燃料が損傷した。 <p>政府事故調中間報告、新聞報道等</p>	<p>➤ 東京における記者レクにおいては、この前後で、炉心損傷に関して説明を行った記録が残っていない。</p>
4/10		<p>炉心損傷の対外的に説明する用語について</p> <ul style="list-style-type: none"> 保安院は、炉心状況を説明する用語の整理と炉心状況の分析に着手した。その頃、統合本部において、炉心状況を説明する用語を議論していた際、「炉心溶融」ではなく、「燃料ペレットの溶融」との言葉を使った方がよいとの有力な意見があった。その後、保安院職員は、東京電力社員からそのような議論があったことを聞き、以降、炉心状況を説明する際には「炉心溶融」という用語に代えて「燃料ペレットの溶融」という用語を使うこととし、その旨東京電力にも連絡した。 <p>政府事故調</p>	
5/24		<p>事故の発生・進展状況についてとりまとめた結果を公表</p> <ul style="list-style-type: none"> シビアアクシデント解析コード（MAAP）の解析結果やプラントデータを用いて事故進展状況を推定（5/23保安院へ報告、5/24公表） 1号機：「溶融した燃料によりRPVが破損したとの結果となっている。東京電力においては、この結果に加え、これまでのRPV温度の計測結果を踏まえて、燃料の大部分は、実際にはRPV下部で冷却されているものと評価」 2号機：「東京電力による解析では、代替注水の流量が少なかった場合には、溶融した燃料によりRPVが破損したとの結果となっている。東京電力においては、この結果に加え、これまでのRPV温度の計測結果を踏まえて、燃料の大部分は、実際にはRPV下部で冷却されているものと評価している。」 3号機：「東京電力による解析では、代替注水の流量が少なかった場合には、溶融した燃料によりRPVが破損したとの結果となっている。東京電力においては、この結果に加え、これまでのRPV温度の計測結果を踏まえると、燃料の大部分は、実際にはRPV下部で冷却されているものと評価している。」 	<p>➤ 温度計の指示値を過度に重視した結果、炉心損傷状態を誤って認識した。</p>
6/6		<p>事故の発生・進展状況についてとりまとめた結果を公表</p> <ul style="list-style-type: none"> 原子力安全・保安院は同じくシビアアクシデント解析コード（MELCOR）を用いてクロスチェックを実施し、プラントデータも併せて事故進展状況を推定（6/6保安院公表） 1号機：「燃料は溶融し、その相当量はRPV底部に堆積しているものと現時点では推定される。ただし、RPV底部が損傷し、燃料の一部がD/Wフロア（下部ペDESTAL）に落下して堆積している可能性も現時点では考えられる。RPV温度の計測結果を踏まえると、燃料の相当量はRPV下部で冷却されていると考えられる。」 2号機：「現時点では、燃料の相当量はRPV内にあるものと推定される。ただし、RPV底部が損傷し、燃料の一部がD/Wフロア（下部ペDESTAL）に落下して堆積している可能性も現時点では否定できない。」 3号機：「燃料の相当量はRPV内にあるものと考えられる。ただし、RPV底部が損傷し、燃料の一部がD/Wフロア（下部ペDESTAL）に落下して堆積している可能性も現時点では否定できない。」 <p>原子力安全に関するIAEA閣僚会議に対する日本国政府の報告書（6/7）（上記記載は、5/24東電公表、6/6保安院公表の内容をIAEA閣僚会議に対する政府報告書から抜粋）</p>	

日時	評価	主な対外説明案件（行政機関への通報は行ったがプレス未実施のものも含む） / 事象	備考
11/30	c	<p>炉心損傷状況の推定について公表 当社は、保安院が主催した「技術ワークショップ」、その後の会見において、以下の推定内容を公表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1号機：海水注入までの期間の崩壊熱量は注水量などの吸収熱量を大きく上回っていること、また、原子炉圧力容器温度が早い段階から低いことなどから、燃料の大部分が格納容器に落下していると推定 ・ 2号機、3号機：注水が停止している際の崩壊熱量は初期に圧力容器内に存在した水の蒸発により吸収できる程度であること、また、CS系注水による温度の下降などを鑑みると、1号機と比較して損傷の程度は小さく、格納容器に落下した燃料の量も少ないと推定 ・ 1号機におけるコア・コンクリート反応による侵食は、現実的な条件を考慮すると約70cm程度。現時点では、格納容器内ガスの分析結果を踏まえると、現在進行形でコア・コンクリート反応が発生しているとは考えにくく、燃料は格納容器内に留まっていると推定 ・ 1号機～3号機について、格納容器各部の温度、原子炉建屋内の蒸気の発生状況から、燃料は十分冷却されていると推定 <p>11/30 保安院が開催した「福島第一原子力発電所1 - 3号機の炉心損傷状況の推定に関する技術ワークショップ」、当社記者会見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 当社は、炉心損傷状況の推定内容について2011年9月末頃を目標に公表すべく準備をしていた。 ➢ 炉心損傷状況の推定内容について、保安院への説明に時間を要した。